研究課題　幕末維新期における民衆生活の改変と信心の歴史的転回に関する調査・研究

研究経費　五六万四〇三九円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　奈倉哲三（跡見学園女子大学、以下Ａ）

　所内共同研究者　石津裕之・杉本史子・箱石大

　所外共同研究者　小田真裕（船橋市郷土資料館、以下Ｂ）・児玉憲治（千葉県文書館、以下Ｃ）・千葉茉耶（野村胡堂・あらえびす記念館、以下Ｄ）・斎藤悦正（本郷中学校・高等学校、以下Ｅ）・芹口真結子（岐阜大学地域科学部、以下Ｆ）・清水有子（明治大学文学部、以下Ｇ）

研究の概要

（１）課題の概要

　近世の民衆は各地の日常的な生活のなかに「信心行為」を抱え込んでいた。幕末期において、その信心は社会変動の一環として大きく歴史的に転回する。その転回は、維新期においては権力的な改変によるものも大きいが、民衆自身が自らの生活を改変していこうとする苦闘のなかで、信心を転回していく動きとしても生まれていた。従来、「幕末民衆宗教の誕生」といった括りでは捉えられていたこの歴史事象を、ごく普通の生活を営む民衆が地域生活を改変させるなかで、信心をも転回させていた現象として、史料から解明する課題が本共同研究の根底にある。この根底の課題を果たすには、各地の多様な信仰の実態を、地域生活が具体的に判る史料とともに解明することが必須である。本共同研究の直接的な課題は、この根底の課題に寄与し得る史料が、どの地域にどのように存在しているかを目録の状態を含めて具に調査したうえで、その史料研究成果を社会に発信することにある。

（２）研究の成果

　A:安政六年、多摩川堤防決壊による九ヵ村用水冠水に対し、用水普請でも今回の用水普請は公儀普請とすべしと要求する拝島～柴崎九ヵ村の地域共同体の力が解明された。普済寺文書中、文久二年の雨安居に関する冊子六冊から、普済寺での「雨乞祈禱」の内容が詳細に判明した。長沼家文書中、遊行上人御用日記から、藤沢遊行寺での調査が新たな課題となった。小川家文書一〇三六点の仮目録を作成する準備が整った。B:平田篤胤門人の宮負定雄・大原幽学門人の椎名旋蔵と縁戚関係を有する金杉佐久治家文書中に嘉永年間の気吹舎出版物を確認。また、開披不能文書を業者委託で開披し、地域における大原幽学門人の実践がわかる史料を翻刻し、記念館に提供した。C:下奈良・中奈良両村が所属する奈良堰用水組合の基礎的な事実関係が判明した。飯塚家が名主を勤める下奈良村依田氏知行所で費用の立て替えや割付などを通じ、用水組合のなかで下奈良・中奈良両村の関係が判明してきた。また中奈良村に限れば、用水利用の前提となる土地所有関係が時系列的に再現できる可能性も出てきた。D:旧修験宮崎家所蔵資料には、近世だけでなく、明治・大正期の史料も多数含まれている。特に宮崎求馬は明治以降、紫波郡内一四社の社掌も務め、常駐神職のいない小規模神社や地域住民が管理する村社の動向が窺われる。E:村内百姓の菩提寺は曹洞宗長林寺一か寺のみという特色。宗門改帳・過去帳・施餓鬼過去帳・祠堂金借用証文などから、家格が反映される戒名や施餓鬼寄付などを検討していく。F:東本願寺家臣粟津家「粟津日記」は慶応元年～慶応四年までの記事が収録。粟津家に奉公する下男下女の奉公記事には出身国・檀那寺記載があり、北陸や美濃国などからも百姓身分の者が奉公に出ていることが判明。檀那寺宗旨も東本願寺だけに限らず、浄土宗など他宗派も確認できた。東京大学史料編纂所貴重書「修史局雑綴」は修史局からの教部省組織に関する問い合わせへの回答を記したもの。G:東京大学史料編纂所所蔵貴重書から、幕末の浦上キリシタンに関する文書を選定、「外務省引継書類」四点、「維新史料引継本」一点の撮影を業者委託した。長崎純心大学博物館所蔵キリシタン関係史料のうち、浦上潜伏キリシタンに関連の書付・書状・オラショ本などを撮影。長崎歴史文化博物館所蔵史料のうち、浦上村山里庄屋高谷家関係史料のほか、安政四年・万延元年・慶応三年の長崎奉行所の御用留、浦上崩れ時に長崎奉行所が作成した調書などを調査。安政年間の「口上書」には「物真似手踊り」願の写が多数含まれ、史料分析を進めた。  
 上記調査活動について、各人は毎回「調査概要報告書」を全員に報告、認識を共有し、活発に意見交換した。特にAとCは用水組合下流村落による指導権と責任について議論。Dが進めている目録作成については、A・B・Cが具体的な提言をおこなうなど、援助・協力体制を組んだ。またEの曹洞宗寺院と村落、Fの粟津家奉公人問題、Gの浦上キリシタン地域での安政期の「手踊り史料」などについて、それぞれAと意見交換するなどして、地域と信心問題を共同で深めてきた。

研究課題　和歌山平野を中心とした地域所在中世史料の調査・研究

研究経費　四〇万円

研究組織

　研究代表者　　　坂本亮太（和歌山県立博物館）

　所内共同研究者　末柄豊・村井祐樹・小瀬玄士

　所外共同研究者　小橋勇介（和歌山市立博物館）・砂川佳子（和歌山県立文書館）

研究の概要

（１）課題の概要

　和歌山県における中世史料は、『和歌山県史』の刊行により、その全貌がほぼ明らかになっている。また、本研究で対象とする和歌山平野域（主に和歌山市）については、『県史』刊行後、『和歌山市史』が刊行され、『県史』未収録の史料群も『市史』により把握されている。ただし、当時においても種々の事情により十全な調査・発掘が行われたものではなく、存在は把握していながらも点数が少ないという理由で採録しなかったものや、原本調査に至らず、史料編纂所架蔵影写本に拠らざるを得なかったものも多数あった。さらに、刊行から既に四〇年以上が経過し、その間に新たに発見された史料も少なくない。  
　以上の様な状況の中で、昨年度は、新出林文書のみならず向井文書・歓喜寺文書などの既知の文書の再調査を行った。引き続き本年度も、明治・大正期に作成された影写本や、昭和以降に撮影された写真帳等、豊富な複本類を持つ史料編纂所と共同することで、当該地域所在史料の調査・研究を行いたい。

（２）研究の成果

　以下、調査・撮影を行った史料を挙げる。  
　王子神社文書（和歌山県立博物館寄託）／岡文書（同上）／柏原文書（同上）／熊野速玉大社文書（同上）／綸旨・院宣（高野山金剛峯寺所蔵）  
以上の内、柏原（かせばら）文書は『和歌山県史　中世史料一』には「西光寺文書」として収録され、本所写真帳では「柏原区有文書」（六一七一.六六－一六）として配架されている。また、「綸旨・院宣」は新出で宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集外の金剛峯寺所蔵文書であるが、慎重な検討が必要と考えられる。いずれも今後の和歌山中世史研究における活用が望まれる。

研究課題　中世大和国宇智郡関連史料の研究資源化―栄山寺を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　下村周太郎（早稲田大学）

　所内共同研究者　菊地大樹・尾上陽介・木下竜馬

　所外共同研究者　高木徳郎（早稲田大学）・佐藤亜聖（滋賀県立大学）・山崎竜洋（五條市教育委員会文化財課文化財保存係）

研究の概要

（１）課題の概要

　大和国宇智郡（現・奈良県五條市）は、大和国の南半分を占める吉野郡と河内国および紀伊国と境を接する「国境地帯」であり、大和街道（古代下ツ道）と吉野川とが交わる交通の要衝ともなっている。平安期は興福寺の影響下にあったが、中世になると高野山（真言宗）や葛城山（修験道）など多様な宗教的要素が入り込んでくる。また、南北朝期には南朝の、室町期には河内守護畠山氏（いわゆる分郡守護）の支配を受け、戦国期には国人や地侍による「惣郡」の一揆が結ばれたことでも知られている。  
　上記のように宗教的・社会的にも政治的・軍事的にも特色あるフィールドとなっている中世宇智郡関係史料の研究資源化のため、特に栄山寺を調査対象とする。藤原武智麻呂の創建と伝えられる栄山寺は、奈良時代に遡る全国的にも屈指の古刹であり、古代以来の古文書や金石文を伝えている。しかし、現在は文書の所蔵先が分散していることもあって、史料群の全体像を完全に把握するには至っていない。こうしたことから、栄山寺の金石文や古文書諸写本、栄山寺文書以外の同寺関連史料などの調査を軸に、宇智郡関連史料の研究資源化に取り組む。

（２）研究の成果

　栄山寺の中世石造物は戦前から存在が知られており、史料編纂所には紀年銘のある一石五輪塔の拓本が架蔵されている。戦後にも『五條市史』において調査報告がなされており、その内容はおおむね一致するが、後者には一部新出史料も含まれていた。その後は調査が実施されておらず、無紀年銘五輪塔を含む五輪塔群の全貌や現状について悉皆的な調査が望まれていた。  
　昨年度に引き続く今年度の調査により、一石五輪塔群の現状を全面的に把握することができた。戦前以来、逸失したものはわずかであり、同五輪塔群全体の保存状態が比較的良好であることが確認された。また、過去になされた調査はおもに紀年銘が完全に残っているものを対象としていることが分かったが、今回の調査を通じて、干支のみあるいは人名のみの銘文をあらたに多数見出すことができ、これらについても網羅的に拓本の採取を実施した。  
　今年度は、一石五輪塔に加えて、重要文化財に指定されている弘安七年銘の石灯籠や、従来未調査であった永禄八年銘の石造地蔵菩薩像についても調査を行うことができた。石灯籠の銘文については、火袋の左右にある種子（梵字）も拓本を採取することができ、これが「ウン・バイ（愛染カ・薬師）」であることを確認できた。現在の栄山寺の本堂と本尊は、室町期に建立・造立された薬師堂と薬師如来であるが、かかる信仰が鎌倉時代にさかのぼる可能性が想定できる。文書史料が極めて乏しい鎌倉時代の栄山寺を考える上で貴重な史料と言える。また、石造地蔵菩薩像については、新出の史料であり注目される。複数の僧侶の名が刻まれているが、このうち「英秀」なる人物は、永禄四年の文書史料に「一﨟」としてその名が見える。  
　今回の共同研究によって栄山寺の石造物を悉皆的に調査することができ、銘文の分析から地蔵菩薩像や一石五輪塔が寺内の上層の僧侶によって造立されていたことを明らかにできた。栄山寺の寺内組織や信仰のあり方などを考える貴重な素材を得られたと言えよう。

研究課題　承久の乱関係史料の基礎的研究

研究経費　六六万七五一〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　長村祥知（京都府京都文化博物館 〈五月まで〉、富山大学〈六月より〉）

　所内共同研究者　木下竜馬・藤原重雄・堀川康史

　所外共同研究者　梅沢 恵（神奈川県立金沢文庫）・小倉嘉夫（大阪青山歴史文学博物館）・西谷功（泉涌寺宝物館心照殿）・貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）・山岡 瞳（京都府立大学）・渡邊浩貴（神奈川県立歴史博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

　承久の乱とは、承久三年（一二二一）五月、後鳥羽院が鎌倉幕府執権 北条義時の追討を命じるも、上洛した鎌倉方武士に京方武士が合戦で敗北し、後鳥羽を含む三人の上皇が遠方に流された事件である。その研究は長く停滞していたが、近年になって研究書や新書が相次いで刊行されるなど、社会の関心も高まりつつある。  
　本研究課題では、この承久の乱に関する史料を幅広く調査した同題の昨年度共同研究の成果を公表するとともに、さらなる原本調査を進め、いくつかの史料については詳細な調査成果の公表を計画する。  
　かつて承久の乱研究が停滞していた一因は関連史料が限られていたことにあった。その数少ない史料も、『大日本史料』や『大日本古文書』といった先駆的な翻刻に依拠してきたため、かえって史料の原本に即した研究が十分ではない。承久の乱研究を中核として、今後の関連諸課題の基礎となるための、個々の史料に即した研究資源化を進めたい。

（２）研究の成果

　本課題の共同研究員の専門分野は、日本中世の政治史・法制史・宗教史・対外交流史・文学史・絵画史や日本近世の文学史といった諸分野にまたがる。その強みを活かして、古文書・古記録のみならず、古典籍・聖教・絵巻といった様々な歴史的諸史料の原本・実物の調査を進め、後鳥羽院と鎌倉幕府、承久の乱について政治・社会・文化など多角的な視角から検討を加えた。  
　また感染症の広まりを注視して当初予定を柔軟に見直し、一部の史料については出張の代替として画像データを入手した。  
　主要な成果として、以下の点が挙げられる。  
・仁和寺が所蔵する日次記について、調査を進めた。  
・金沢文庫所蔵・管理（称名寺所蔵）史料の画像データおよび明治大学所蔵史料の画像データを入手した。これらのデータは、所蔵機関の許可条件を遵守して今後の研究にも利用する。  
・一九三九年に恩賜京都博物館（現京都国立博物館）で展示された後、所在不明となっていた「承久記絵巻」全六巻（個人蔵。二〇二一年六月からは寄贈により龍光院蔵〈高野山霊宝館寄託〉）の写真版による調査を進めた。

研究課題　松尾大社所蔵史料の研究資源化

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　角田朋彦（駒澤大学）

　所内共同研究者　畑山周平・山田太造・高島晶彦

　所外共同研究者　佐々木創（京都芸術大学）・坪井 剛（佛教大学）・西山 剛（京都文化博物館）・野村朋弘（京都芸術大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、松尾大社が所蔵する史料群について調査・研究を進め、研究資源化するものである。松尾大社は鴨社とともに山城国の重要な神社として位置づけられ、古代から近代に至るまで豊富な史料を有している。目録・整理されている文書群の他、未整理・新出のものも含め2,000点を超す史料が所蔵されていることが確認できている。史料編纂所では戦前及び戦後の早い時期に史料採訪を実施しているものの、未整理・新出史料については撮影・調査されていないものがある。本研究では、これらの全体像を明らかにしつつ、未整理史料を中心に調査・撮影・目録作成を行い、研究資源化を進めたい。松尾大社所蔵史料が研究資源として公開されることによって二十二社体制の具体的な様相はもとより、東寺や地蔵院、革島家との相論など中世の洛西の姿も解明することができよう。  
　また松尾大社所蔵史料は各時代で豊富な史料を有している。料紙の科学的調査のデータ収集対象としても貴重である。それらの基礎的な情報を学界共有の財産として公開していく。

（２）研究の成果

　新型コロナウィルスの感染拡大の影響によって調査が危ぶまれたが、幸いにして松尾大社の御厚意によってニ度調査・撮影を実施することができた。  
　二〇一九～二〇二〇年度に実施された一般共同研究「松尾大社所蔵史料の調査・研究」（代表：野村朋弘）に引き続き、他の一般共同研究「中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史的変遷の研究」（代表：天野真志）と連携し、新出史料の撮影や光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いた料紙の調査・研究、目録整備を実施した。  
　二〇二〇年度に史料一巻（ニ号文書～一一号文書を収録）を史料編纂所にて借用し、修補と調査を実施し、返却を行った。この調査によって一九五〇年代の成巻状況などを把握することが出来た。また更に史料一巻（八九～九七号を収録）を二〇二一年度に借用し修補と調査を実施し、二〇二二年度に返却予定である。なお、借用にあたっての損害保険料を、共同研究費（その他）から支出した。  
　こうした調査・分析によって、既に整備されていた目録の校訂作業と、前近代における伝来の在り方についての知見を得ることが出来た。  
　なお調査・分析した総てのデータを史料編纂所が進める人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業の一環として公開するため、史料編纂所と松尾大社とで覚書の締結を行った。

研究課題　九州所在中世禅宗関係史料の調査・研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　榎本渉（国際日本文化研究センター）

　所内共同研究者　川本慎自・小瀬玄士

　所外共同研究者　藤田励夫（文化庁）・佐藤健治（文化庁）・岡村一幸（文化庁）

研究の概要

（１）課題の概要

　九州は大陸との地理的な関係もあって、多くの禅宗古刹が残されており、中世史料を始めとする貴重な史料を所蔵するところも少なくない。本研究においては、こうした九州に所在する禅宗関係史料を調査・撮影し、そのデジタル化を推進することで研究の進展に寄与することを図るものである。昨今のコロナ禍により、残念ながら頻繁な現地調査は難しさの度を増しており、史料の高度なデジタル化による閲覧の便宜性向上は喫緊の課題である。なお禅宗史料においては、古文書だけではなく、行状や語録といった禅僧個人の記録、僧伝も多く作成されているが、こうした史料については史料編纂所においても、十分に撮影データが揃えられていない実情もある。古文書にとどまらない中世禅宗関係史料を広く採訪し、デジタル撮影による研究資源化を実現し、研究の進展に寄与したい。

（２）研究の成果

　新型コロナウィルス感染症の影響により、当初の計画から変更を余儀なくされる部分もあったが、鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵史料の調査・撮影、および大慈寺所蔵史料の調査・撮影を実施することができた。黎明館においては、文之玄昌関係史料や、島津家関係禅宗寺院史料の調査・撮影を行った。また大慈寺においては、同寺所蔵史料について、撮影のみならず、共同研究員の知見を踏まえた総合的な目録作成を行った。その結果、南北朝期に大慈寺開山となった玉山玄提関係史料や、その弟子で、東福寺に大蔵経を納入した剛中玄柔関係史料をはじめとして、同寺に伝わる貴重な史料のデジタル画像データと詳細な目録を作成することができた。なかでも剛中が将来した大蔵経の一部とみられる宋版大般若経や元版大般若経について詳細なデータが得られたほか、文書についても料紙をはじめとして、原本からしか得られないデータを、共同研究員の知見によって得ることができた。

研究課題　中世におけるトカラ・奄美・琉球関係史料の学際的研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　村木二郎（国立歴史民俗博物館）

　所内共同研究者　黒嶋敏

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・田中大喜（国立歴史民俗博物館）・鈴木康之（県立広島大学）・池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）

研究の概要

（１）課題の概要

　九州島と沖縄島に挟まれたトカラ・奄美の島々は、中世を通じて独特の歴史を有する境界領域であった。中世前半は日本の最西端と位置付けられ、南九州の勢力の影響を受けた。一四世紀後半以降は、明の冊封を受けた琉球が勢力を拡大して周辺諸島を軍事的に侵攻したため、奄美はその領域内に併呑され、トカラは日本と琉球に両属するような様相を呈する。  
ただし、石上英一編『奄美諸島編年史料』のような網羅的な史料蒐集が行われたにもかかわらず同時代の文献史料は限定的であり、未解明な部分がまだまだ多い。しかし近年、喜界島などで中世集落遺跡が相次いで発掘調査されるようになり、遺跡の消長や陶磁器の流通を追うことで、考古学的に解明することが可能となりつつある。  
そこで本研究では、中世のトカラ・奄美にフィールドを設定し、日本・琉球が及ぼした影響について、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を進めていく。考古学の研究者は現地調査を主とした集落遺跡の検討を、文献史学の研究者は史料編纂所が所蔵する関連資料の原本調査と高精細デジタル撮影を主とした比較・解析を実施する。そして双方の研究成果をもとに議論し、成果を公開して「史資料の研究資源化」を行う。

（２）研究の成果

　史料編纂所所蔵島津家文書の①嘉禄三年藤原頼経袖判下文、②延文元年足利義詮袖判下文、③貞治二年島津道鑑譲状案を、鹿児島県出水郡長島町在住の個人所蔵資料である千竃文書とあわせることで、中世のトカラ（「五島・七島」）・喜界島や奄美大島を含めた南西諸島に関する文献史料による情報を整理した。ここから南九州の武士団が奄美を含めた領域をどのように認識していたかがわかる。さらに近年の発掘調査によって著しい成果を挙げつつある奄美地域の考古学的成果として、喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡、与論島与論城跡出土の陶磁器データと比較した。これらの遺跡は集落遺跡であり、陶磁器の分析によって集落の消長がわかる。その成果からは、一三～一四世紀代の南九州の武士団による影響と、一五世紀中頃の琉球による影響とでは、在地に与えたインパクトは著しく異なるということがわかった。すなわち、前者からは集落遺跡における変化は見られず、文献史料に書かれた事実は専ら表面的な現象であった。それに対して後者は集落を改変、消滅させるにいたる地域社会を根本的に変える事態であった。文献史学の研究者と考古学の研究者が同じ対象を見据えて取り組んだことから導いた成果であり、今後のさらなる学際的研究を促すものであろう。  
　しかし、今年度は新型コロナウィルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限のなかで、調査先が医療資源に乏しい島嶼部であるため、当初予定していた調査を完遂することができなかった。そのため研究費三四万四七四〇円は返金することとした。

研究課題　静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　浦木賢治（静嘉堂文庫美術館）

　所内共同研究者　山口英男・稲田奈津子

　所外共同研究者　吉田恵理（静嘉堂文庫美術館）・市川理恵（駒沢女子大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　（公財）静嘉堂が所蔵する文化財は、明治期から昭和戦前期に三菱創業家の岩﨑彌之助（三菱第二代社長、一八五一〜一九〇八）、小彌太（三菱第四代社長、一八七九〜一九四五）父子により蒐集されたコレクションである。そのなかには、明治期の廃仏毀釈により寺院等から市場へ流れたと考えられる、奈良時代以降に調進されたいわゆる「五月一日経」「善光朱印経」などの古写経群が所蔵されている。これらは近代に形成された財閥系の古写経コレクションの一つとして、貴重な古写経群といえる。しかし、その公開は静嘉堂文庫美術館での展観等に留まり、撮影も充分ではない。本研究では、古写経群の調査、経典全紙のデジタル写真撮影を行い、経典としての基本情報（紙数、界線の幅、罫高等）の収集・整理、経典の特定、料紙基本データ（縦横寸法、厚さ、密度、簀・糸目幅、填料の有無等）の収集・整理等を行い、研究資源化を図る。その成果を目録化し公表することで、古写経研究や料紙研究等に寄与することを企図する。

（２）研究の成果

　静嘉堂所蔵古写経群は美術庫と書庫の二ヶ所に分蔵され、これまでその全容は紹介されていなかった。古写経の巻頭から巻末まで全体を撮影されることもなく、そのため古写経研究への貢献も限定的な状況であった。  
このたびの共同研究で、古写経群の全容を把握し、これまで未調査であった写経の基本調査も行い目録を作成した。未公開の経典も含め、古代から近世にいたる写経を巻頭から巻末まで高解像度デジタル撮影（全九一五カット）を行い、今後、閲覧に供することを計画している。  
共同研究の過程では、「善光朱印経」と「五月一日経」の本文を比較した市川理恵氏の論考が刊行された。この論考では本文全文の詳細な比較検討により新知見を導き出す研究であるが、対象となる古写経の全容を調査･撮影したからこそ結実した研究ともいえる。また静嘉堂が所蔵する「楞伽経」と他館が所蔵する「楞伽経」の関係性についても考察をすすめており、古写経の本文や界幅などの仕様が明確になったからこそ、他館の古写経との異同を検討することができた。また、このたびのデジタル撮影では付属の箱書も対象としており、そこから幕末維新期に活躍した好古家・松浦武四郎が所蔵した古写経が静嘉堂所蔵古写経群に含まれていることが明らかとなった。今後、これらの成果を論文等にまとめて公開する予定である。

研究課題　東大寺文書の近世・近代

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　森哲也（九州大学）

　所内共同研究者　遠藤基郎

　所外共同研究者　坂東俊彦（東大寺史研究所）・三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究課題は、個別文書の活用に際しては、現在に至るまでの文書群の形成、伝来の過程を踏まえておく必要があるとの観点に立ち、東大寺文書（東南院文書を含む）を対象として、現状の成立に深く関わる近世・近代の様相を把握しようとするものである。具体的には、史料採訪側（近世では水戸徳川家、加賀前田家等）が作成した点検記録と、東大寺側の記録（『東大寺執行所日記』等）とを照合することで、具体的な採訪過程、書写された文書・典籍を確認する。合わせて各院家・組織の変遷を踏まえながら、現状の成立過程、所属した文書群等を明らかにするための基礎的考察を行う。また、寺外所在の東大寺文書に関し、伝来に関わった人物の関係史料、状況を記す陳述史料、東大寺内の記録等を分析することにより、寺外流出の事情・背景、伝来過程等を解明する。その成果を公開することで、必ずしも当該分野に関心が高いとは思われない近現代史研究者の注意をも喚起し、未知あるいは現蔵者不明の文書に関して、所在や関係史料等の情報提供につながるようにする。

（２）研究の成果

　まず研究会における報告を中心に述べる。森報告は、天和元（一六八一）年の水戸徳川家、加賀前田家による東大寺への史料採訪の過程と、その際に調査、書写された文書・典籍を具体的に比定するもので、当該期における東大寺文書の状況を考える基礎的考察と位置付けられる。これに関して、坂東研究員から加賀前田家の史料採訪に関わる史料が奈良大学に所蔵されている旨の情報が示されたので、二〇二二年度に調査を予定している。江戸期に実施された称名寺への史料採訪を対象とする三輪報告によると、東大寺と同じ採訪主体の事例も確認され、採訪事業の性格・意図を考える上で重要な手がかりとなる。坂東報告は、『東大寺要録』写本の調査・分析を通じて、典籍・文書の状況と近世東南院の歴史との関係を考察し、遠藤報告は、近世～近代における東大寺文書の調査・整理の歩みを確認した上で、個々の特徴、関心の変化を指摘するとともに、現状成立過程への見通しを示す内容であり、これらの成果を踏まえながら、二〇二二年度の研究を進めてゆく予定である。  
国立公文書館（内閣文庫）所蔵の東大寺文書に関わる小原竹香（正棟）の事績を知るため、津山郷土博物館所蔵の史料を調査した。東大寺との直接の関係を示す史料は見出せなかったものの、彼の人的交流など東大寺文書流出の背景を探る手がかりとして、今後も参照する余地が残っている。活字化された古書籍関係史料から、東大寺文書、奈良の文化財等に関連する記載を抽出したが、これは近・現代における東大寺文書の寺外流出、その後の伝来を探る上で手がかりとなるものである。

研究課題　中・近世畿内寺院史料の調査・研究と研究資源化―大和元興寺および和泉池辺家史料を中心とする―

研究経費　八四万二五〇〇円（前年度よりの繰越分を含む）

研究組織

　研究代表者　　　服部光真（元興寺文化財研究所）

　所内共同研究者　藤原重雄・遠藤基郎

　所外共同研究者　三宅徹誠（元興寺文化財研究所）・阿部泰郎（龍谷大学）・森下徹（和泉市教育委員会）・澤井廣次（天理大学附属天理図書館）

研究の概要

（１）課題の概要

　有力な寺社が集まる畿内では、今なお多くの中世史料が未調査・未紹介のままとなっている。日本仏教の一大拠点であり、寺院を核として形成された各地域社会や歴史都市を抱える畿内の中世宗教史研究の進展には中小寺院を含めた史料の研究資源化が不可欠である。  
　本研究では、中小規模寺院を中心に大和・和泉の中世史料の再調査および過去の調査成果の精査による研究資源化を行う。具体的には元興寺文化財研究所と史料編纂所の蓄積を照合し、中小規模寺院の中世史料の所在データの情報化および画像のデジタル化を行い、研究資源化を図る。また個別的には「庶民信仰資料」としての性格を付されて資料化された元興寺、一〇世紀に遡る『修善講式』を核とする池辺家史料について、周辺史料を含めた再調査を行い、近年の寺院史料論・宗教テクスト研究の成果を踏まえて史料学的研究を深化させることで、寺院史料・宗教史料の再調査による資料化の具体的実践例として成果を提示する。  
※二〇二〇年度繰越の研究課題と一体的に実施した。

（２）研究の成果

　念仏寺文書は近世初頭から近代までの五三〇点を調査して文書群の全体像を把握するとともに、近世都市社会における浄土宗寺院の様相を具体的に捉えることが可能となった。般若寺文書・池辺家史料については、中世前期までの史料を核としつつも、中世後期から近世にかけての周辺史料をも合わせて対象とすることで、史料群としての伝来や機能、宗教テクスト遺産としての位置付けを検討することができた。これらに関わる個々の史料の個別的な検討を論考としてまとめ、すでに下記成果物も公表している。また、念仏寺文書の袋中良定関係史料、文久修陵関係史料などについては、史料編纂所採訪による他機関等所蔵の史料を参照・比較することにより、その位置づけや史料的価値を検討できた。  
　感染症拡大下を考慮し、元興寺所蔵史料の撮影は、点数が多く状態も多様なため、現状の確認と方針の検討を行い、目録と対照させながら二・三年かけて撮影するのが適当と判断し、下準備の作業を進めた。別途、近く実施したい。あわせて、元興寺文化財研究所による過去の調査資料類を一部通覧して、関連寺社の史料調査状況から、史料編纂所による採訪調査の及ばない範囲を多く確認した。元興寺所蔵の印仏についても、修補で台紙貼りとなる以前の紙背を撮影したフィルムなどを把握している。今後も継続的に、相互補完となるよう個別の所蔵先について丁寧に解決してゆきたい。

研究課題　修理の知見を踏まえた中世真言密教聖教・紙背文書の史料学的分析―灌頂記を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

　所内共同研究者　藤原重雄・堀川康史

　所外共同研究者　稲穂将士（京都府立丹後郷土資料館）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析、画像公開を行う。対象史料は東京大学史料編纂所が所蔵する南北朝期の伝法灌頂記「桂宮院伝法灌頂記」と「薄草紙口決」断簡である。前者は他写本に乏しい未紹介史料で、丹後国の軍事情勢に関わる紙背文書が含まれる。後者は金沢文庫外の「薄草紙口決」と形態が類似しており、比較の結果次第では称名寺聖教との関係も解明し得る。本研究では両史料を翻刻した上で、内容理解に資する関連史料や比較に適した史料の調査・採訪を行い、成立過程・内容を分析し、解題を作成する。  
　本研究では、上記の作業に加えて、対象史料の修理を行い、その過程で料紙に関する現時点での標準的データを採取し、料紙研究の視角からも分析を加える。修補紙のない状態で釈文を校正するとともに、貼紙・錯簡などの原形態を検討し、史料の生成・伝来過程を探る。  
　以上の作業を経て、登録・閲覧可能な状態として修理を終え、画像のWeb公開および翻刻・解題を発表する。

（２）研究の成果

　本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析を行った。  
　『延文五年桂宮院伝法灌頂私記』に関しては、修理時や料紙分析等の知見をもとに錯簡を正したうえで、聖教面については寺院史を専門とする三輪が、紙背文書については室町幕府政治史を専門とする堀川が分析を進め、藤原が助言を加えた。検討の結果、本史料は真言密教寺院と律院との関わりや、真言僧と律僧が共同で行った伝法灌頂の様子、その作法次第を決定していく経緯、東寺教学における桂宮院流の位置づけなどを知るうえで興味深い史料であること、また、紙背文書には延文五年の丹後の軍事情勢について記したものがあるが、そのなかには従来は知られていない室町幕府政治史に関わる貴重な情報も含まれることを具体的に明らかにすることができた。また、紙背文書に関係する南北朝期丹後国関係史料として、京都府立丹後郷土館寄託の丹後日置氏関係史料（「田邊文書」「百鳥講文書」等）を調査・撮影した。これらの撮影史料は、Hi-CAT Plusを通じて閲覧室利用が可能となる予定である。調査にあたっては、同館学芸員の稲穂が所蔵者との調整などを行った。  
　「薄草紙口決」断簡については、検討の結果、称名寺聖教とも断定できず、詳細は今後に委ねることとし、同じく未整理史料の中に大破した『富岡八幡宮及慶珊寺縁起』を見いだし、これの修補から公開を進めた。二〇二一年度には本課題と並行して、本研究グループのメンバーを中心に金沢文庫と史料編纂所との合同で、慶珊寺所蔵『大般若経』全六百巻（智感版を含むことで著名）の撮影を完了しており、関連史料としての再評価・活用、金沢文庫での展覧会を通じた研究成果の公開が期待できる。

研究課題　香川県下所在の中世史料の調査と史料学的研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　守田逸人（香川大学）

　所内共同研究者　井上聡

　所外共同研究者　田中健二（香川大学名誉教授）・橋詰茂（徳島文理大学元教授）

研究の概要

（１）課題の概要

　香川県下に所在する中世文書は、一九九〇年に刊行された『香川県史　第八巻　古代・中世史料』の編纂を機に、網羅的な収集・調査が行われた。しかし、その後三〇年あまりの時間が経過し、新たな史料が確認されたり、その後の研究の進展等に伴い再び全体の調査が必要になった文書群も少なくなくない。  
とくに、香川県下の中世文書で最大の規模を誇る善通寺文書は、史料編纂所においても、また香川県現地においても中世文書の全貌や、近世文書等も含めた文書群全体の性格も把握できておらず、日本列島を代表する地方有力寺院としては研究史的に全くの盲点となってきた。  
本共同研究では、史料編纂所の採訪活動とも連携しながら、善通寺文書を中心に香川県下の中世文書原本の調査・再調査を行うことで、未発掘史料の調査・研究およびその公開、既知の文書群の再評価等の研究を進める。同時に、香川県下の中世史料の全体像を把握し、史料編纂所と地域で史料情報の共有化を図っていくことを目指した。

（２）研究の成果

　本一般共同研究では、香川県下の中世文書のうち、塩飽勤番所所蔵文書と、とくに県下で最も大きな規模を誇る善通寺文書に焦点を充てて調査・撮影を行ってきた。  
その結果、善通寺文書については、これまで所在が明確でなかった多くの史料を再発見することができた。また、これまで全く研究がなかった善通寺文書の文書群の性格についても、多くの知見を得ることが出来た。  
さらに、昨年度末に行った調査ではこれまで全く知られていなかった中世聖教類の一群も発見できた。それらについては、二〇二一年度の調査では具体的な調査・撮影に至らなかったため、今後引き続き調査・撮影を行う必要があると考えている。そして、それらの作業を経て善通寺文書全体のあり方について総合的に分析を行い、報告書等の成果報告を計画している。

研究課題　菅浦現地伝来史料の作成時期と料紙に関する研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　青柳周一（滋賀大学）

　所内共同研究者　末柄豊・井上聡・高島晶彦

　所外共同研究者　宇佐見隆之（滋賀大学）・大河内勇介（福井県立歴史博物館）

研究の概要

（１）課題の概要

　滋賀県長浜市西浅井町菅浦は国宝「菅浦文書」（一二七一点。滋賀大学経済学部附属史料館寄託）が伝来した場所として有名であるが、現地の阿弥陀寺をはじめとして、この「菅浦文書」とは別に、中世の年紀が記された史料が伝来している。作成時期が近世である可能性も考えられることから、本研究では使用されている料紙にも注目して精査を行う。あわせて「菅浦文書」中に含まれる近世史料や、字の形状等から中世ではなく近世の作成という可能性がある史料数点についても、内容や紙質等について多角的な比較検討を実施する。

（２）研究の成果

　コロナ感染による警戒が続くなか、一二月に一度、滋賀大学経済学部附属史料館および菅浦区において史料原本の調査を実施することができた。史料館においては、国宝菅浦文書のうち従来作成年代などに疑義が呈されている史料約三五点について、最新機器を用いてその紙質分析を詳細に実施した。また菅浦区内の阿弥陀寺に蔵される同区有文書の調査も実践し、中世にさかのぼる可能性のある文書約一〇点を対象とした。調査結果の詳細な分析と検討は進行中であるが、概報に従うならば、紙質の面からみると、菅浦文書に寄せられた疑義の多くは退けられる可能性が高く、研究史の見直し・再検討が予想される。また菅浦区有文書については、近世の写という可能性が極めて低いことが確認された。こうした成果は現在刊行の準備を進めている史料集、『菅浦文書集成（仮）』（吉川弘文館より上下二巻で刊行予定）に反映させてゆく予定である。  
なお本調査の成果等は、二〇二二年度一般共同研究「国宝菅浦文書と関連史料の伝来形態と料紙に関する研究」（研究代表　宇佐見隆之・滋賀大学教育学部教授）に引き継ぐ形でさらなる推進を図ってゆく予定である。

研究課題　中近世古文書の多面的分析にもとづく料紙の歴史的変遷の研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　天野真志（国立歴史民俗博物館）

　所内共同研究者　山田太造・尾上陽介・高島晶彦・渋谷綾子・小瀬玄士

　所外共同研究者　小倉慈司（国立歴史民俗博物館）・富田正弘（富山大学）・野村朋弘（京都芸術大学）・柳原敏昭（東北大学）・高橋修（茨城大学）・名和知彦（陽明文庫）・貫井裕恵（神奈川県立金沢文庫）・大山恒（茂木町教育委員会図書文化係）

研究の概要

（１）課題の概要

　古文書研究の進展を目指す上で、文字情報だけでなく料紙繊維や添加物等の物質的情報、さらには抄紙過程に付与された痕跡の確認など、古文書を多面的に分析する方法論の確立が求められる。本研究では、これらの課題を検討するために、考古学的分析手法や植物学などの成果を踏まえた古文書料紙の歴史的変遷を検討する。  
　本研究では、光学顕微鏡やデジタルマイクロスコープを用いて料紙を非破壊的に調査し、繊維および添加物の状態を分析する。特に、古文書料紙の構成物の種類・量・密度などの質的な解析によって製造手法や地域的・時期的特性を見出し、料紙の生産および使用実態を双方向的に検討することで、歴史的・社会的変遷の復元をおこなう。具体的には、史料編纂所所蔵「島津家文書」、陽明文庫、松尾大社所蔵文書、仁和寺所蔵文書、ふみの森もてぎ所蔵「茂木文書」、東北大学保管「結城白河家文書」を調査し、料紙に含まれる繊維や添加物などの構成物解析をおこなう。また、抄紙過程で付与される糸目や簀目、皺などの表面情報を調査し、古文書料紙を構成する多様な基礎情報を蓄積することで、中世から戦国期における公家・武家文書の地域的特質や歴史的変遷について科学的検証に基づく検討をおこなう。

（２）研究の成果

　新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初予定していた調査・研究活動が大幅に制限されたが、これまでに確立した分析手法に基づき、松尾大社所蔵史料、ふみの森所蔵「茂木文書」の調査・研究を実施した。松尾大社所蔵史料は、これまでの調査蓄積を踏まえつつ料紙の顕微鏡撮影を行い、填料の含有量に関する時代的変遷を分析するための基礎情報を充実させることができた。さらに、明治太政官制下における発給文書の顕微鏡撮影を行い、当該期における文書名称と料紙の性格との相関関係を検討した。「茂木文書」については、焼損箇所に注目して料紙および填料の変化を検討するための顕微鏡撮影を実施し、同文書群の特質を踏まえた検討の方向性を協議することができた。  
また、料紙の地域的特性を検討するために、西ノ内紙の産地である常陸大宮市において楮畑を調査し、DNA分析のためのサンプルを採取するとともに、簀や摺鉢などかつて抄紙に用いられていた道具の現況調査をおこない、古文書料紙をとりまく多様な資料分析の可能性を検討した。  
　本共同研究で料紙の構成物に注目し、古文書を多角的に検討したことにより、文書料紙の時代的変遷や地域特性を中心とした情報抽出の可能性を提示することに繋がり、関連する科学研究費と連携して調査ハンドブックを作成するに至った。あわせて、調査データの利用・公開に向けた議論も進み、博物館展示の計画を含む成果発信も予定している。

研究課題　「院号定部類記」の共同利用に向けての調査・研究・公開―東山御文庫本系諸本を中心に―

研究経費　四九万五千円

研究組織

　研究代表者　　　野口華世（共愛学園前橋国際大学）

　所内共同研究者　小塩慶・堀川康史

　所外共同研究者　伴瀬明美（大阪大学）・高松百香（東京学芸大学）・河合佐知子（国立歴史民俗博物館）・長田郁子（世田谷区区史編さん史料調査員）

研究の概要

（１）課題の概要

　王家の皇女や后が女院になるためには、院号宣下という手続きが必要であり、この前後の状況を女院ごとに記した史料が「院号定部類記」である。中でも東三条院から室町院までの三五人の記録を収めたものが、従来の女院研究で多く使用されてきた。しかし、この記録は女院とその周辺に関する基礎的な史料でありながら、現存諸本が近世の写本であることから、史料批判となる諸本研究、さらには全体を通じての史料翻刻もほとんど行われていない。昨今、中世の女院や后の研究が盛んに進められているなかで、諸本研究および翻刻は喫緊の課題といえる。  
したがって本共同研究では、よく利用されてきた東山御文庫本系統の諸本について考える。同系統本としては、東山御文庫本（史料編纂所図書室パソコンで閲覧可能）・史料編纂所架蔵謄写本の水戸彰考館本、さらには宮内庁書陵部本・内閣文庫本がある。この中でも、特に一般的に利便性の高い内閣文庫本を利用しながら、諸本も参照しつつ翻刻をすすめ、近世の写本であるがゆえの明らかな誤写を検討し修正していく。これらにより中世王家の女性の研究の進展に寄与でき、また近世における部類記書写の広がりを解明できる。

（２）研究の成果

　本共同研究による最大の成果は「院号定部類記」翻刻の公表である。共同研究者と研究協力者の協力を得て「院号定部類記」の翻刻が完結した。また、原本調査の実施によって「院号定部類記」の諸本についても新たな知見を得ることができた。  
　翻刻に関して、本共同研究が扱った東山御文庫本系「院号定部類記」は、一～三六番目の女院のうち、九番目皇嘉門院を除く三五人の女院の院号定の記事を集めている。すでに研究代表者による科研報告書（基盤研究（C）（一般）一七K〇三〇七四）にて、そのうち一一 女院の記事の翻刻は公表している。本共同研究では、その他の全二四女院についての記事を翻刻した。底本には、ホームページでの公開により利便性の高い「内閣文庫本」を用いた。なお、「国立公文書館デジタルアーカイブ」請求番号一四四ー〇四七九の「記録部類」中の「院号」一～六、が該当する。また明らかにわかる文字の間違いは、断りなく修正している場合があり、その際、同系統の他本を参照している。これは史料としての便宜を重視するためである。以上の翻刻は、『東京大学史料編纂所研究成果報告書（二〇二一－一七）』として発刊した。  
「院号定部類記」の翻刻が完結したことにより、研究資源化が果たされた。また誤写の修正などを施した翻刻は、その共同利用を促進させ、この分野の研究進展に大いに寄与するだろう。

研究課題　加藤嘉明関係文書の総合的研究―史料編纂所架蔵影写本「近江水口加藤子爵家文書」を基盤に―

研究経費　二六万三八〇七円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　山内治朋（愛媛県歴史文化博物館）

　所内共同研究者　井上聡・村井祐樹・畑山周平

　所外共同研究者　井上淳（愛媛県歴史文化博物館）・土居聡朋（愛媛県教育委員会生涯学習課）・藤本誉博（〔一財〕今治文化振興会今治城）・川島佳弘（松山市坂の上の雲ミュージアム）・甲斐未希子（愛媛県スポーツ・文化部まなび推進課）

研究の概要

（１）課題の概要

　加藤嘉明は、豊臣秀吉のもとで大名となり、秀吉没後は徳川家康のもとでその地位を固めた近世初期の大名である。その領国支配は伊予国内で３２年と生涯の約半分に及び、伊予の近世の礎を築いた一人である。これまで、自治体史・展覧会図録などに掲載された関連史料も少なくないが、集約的な史料集や目録などはいまだ作成されておらず、近年愛媛県で松山城築城者として嘉明への関心が高まりを見せる反面で、嘉明に関する研究はあまり進んでいない現状にある。本研究では、昨年度の加藤嘉明受給文書の収集・調査に引き続き、発給文書および関連する一次史料について、加藤嘉明関係自治体における情報・データベースなどを活用するとともに、愛媛県の博物館活動の成果なども継承しつつ情報把握・整理を進める。未調査の史料については史料調査を行うなどしながら、目録化を進め、未公刊の史料を紹介し、今後の加藤嘉明関連の研究に資する基本情報を公開する。

（２）研究の成果

　以下、調査を行った文書をあげる。   
　【大阪調査】  
　〔大阪城天守閣所蔵文書〕  
　【愛媛調査】  
　〔愛媛県歴史文化博物館所蔵文書〕〔歯長寺文書〕〔光林寺文書〕　　　　　　　　　　　　  
　　以上の内、愛媛県歴史文化博物館所蔵の加藤嘉明関係史料は、新出文書であり、発見された意義は極めて大きい。また歯長寺文書・光林寺文書は百数十年ぶりの本所による採訪で初めて写真撮影が行われた。　  
　東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一―四「近江水口加藤子爵家文書―豊臣政権編―」を刊行した。

研究課題　武田流弓馬故実書の形成過程に関する史料学的研究

研究経費　五五万三四五八円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　阿部能久（聖学院大学）

　所内共同研究者　高橋慎一朗・林晃弘

　所外共同研究者　大澤 泉（鎌倉歴史文化交流館）・石井千紘（鎌倉国宝館）

研究の概要

（１）課題の概要

　流鏑馬・笠懸・犬追物などの騎射の武芸は、鎌倉時代の武士の鍛錬手段として広く行われたものであるが、室町時代以降は衰退に向かい、江戸時代に入って弓馬故実として再構成された。とりわけ流鏑馬は、現代まで伝承されて各地の神社祭礼などの際に執行され、国際的にも関心が高い。現代に伝わる流鏑馬などの弓馬故実は、主に武田流と小笠原流に大別され、鎌倉時代から続く鶴岡八幡宮の流鏑馬においても、両流によって流鏑馬の奉仕がなされている。しかし、戦国時代から江戸時代にかけて展開した弓馬故実の形成過程はかなり複雑であり、いまだ明確にされてはいない。  
　本共同研究は、鎌倉の金子家に伝来した学界未紹介の武田流弓馬故実書群の目録作成と原本調査による奥書の分析を通じて、その史料群としての性格を明らかにし、中世から近世にかけての弓馬故実の形成・伝承過程と、現代鎌倉を代表する伝統行事である流鏑馬故実の歴史的系譜を解明することをめざすものである。

（２）研究の成果

　前年度に作成・公開した冊子分の目録に漏れていた冊子を、新たに二二点確認することができた。また、巻子の史料群五〇点につき、簡易撮影と目録作成をおこない、とりわけ鳴弦の作法に関わる史料が多いという特徴を明らかにした。さらに、「故実袋」と称される、武家故実に関わる、紙や紐を用いた小型の模型史料群についても調査をおこない、包袋の記載から、これらが江戸後期の熊本藩士・志水隼太正房の手によって整えられたものであることが判明した。  
　熊本県立図書館の調査では、幕末に竹原家から熊本藩士・井上平太に武田流故実が伝授されたことを裏付ける史料を確認することができた。  
　本研究では、現在は鎌倉に伝わる武田流武家故実が、江戸時代の熊本藩で体系化され、井上平太氏、金子有鄰氏を通じて鎌倉へもたらされたという伝播の過程を、熊本藩細川　関係史料の研究蓄積のある史料編纂所との共同研究をおこなうことによって、明確にあとづけることができた。

研究課題　文禄の役における朝鮮王子関連文書の調査・研究・目録化

研究経費　五六万五〇五二円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　川西裕也（新潟大学）

　所内共同研究者　金子拓

　所外共同研究者　木村拓（鹿児島国際大学）・久野哲矢（佐賀県文化スポーツ交流局文化課）

研究の概要

（１）課題の概要

　文禄の役の最中の一五九二年七月、朝鮮国王・宣祖の王子である臨海君・順和君が日本軍によって捕縛された。その後、二人の朝鮮王子は、約一年間にわたって日本軍の捕虜となっていたが、翌年六月、一時的な講和の成立にともなって解放された。  
 　この二人の朝鮮王子のエピソードについては、文禄の役における重大事として広く知られている。しかし、彼らが捕虜となっている間に日本の武将や僧へ送った文書（書簡・詩文など）が日本各地に多数現存することについては、これまでほとんど注目されてこなかった。その結果、二人の朝鮮王子の動向については不明な点がきわめて多い。  
 　本研究では、こうした研究現況を踏まえ、日本に現存する二人の朝鮮王子文書を網羅的に調査・研究・目録化することを目的とする。原本が確認できるものについては実見調査を行い、各文書の詳細なデータを集積する。また、各文書の発給年月日と様式・内容を検討した上で、編年目録の作成と公開を行う。

（２）研究の成果

　二〇一九年度以来続けてきた本共同研究により、日本に現存する朝鮮王子関連文書を網羅的に実見調査することができた。調査を実施した史料所蔵機関は次のとおりである。公益財団法人鍋島報效会（佐賀）、佐賀県立名護屋城博物館史料編纂所（佐賀）、泰長院（佐賀）、本圀寺（京都）、本妙寺（熊本）、八代市立博物館未来の森ミュージアム（熊本）。この調査を通じて、学界未紹介の重要な文書が複数確認されたことは大きな成果であった。現在、蒐集した文書データの整理および分析の最終作業を行っている。  
　また本年度には、オンライン上で関連研究会（壬辰戦争研究会）を八回にわたって開催した。日本国内はもとより国外（韓国・中国・カナダ・スペインなど）から多くの参加者があり、非常に活発な討議が行われた。新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって国内外の移動が強く制限されたが、どこからでも参加が容易なオンライン研究会の開催が定着したことは不幸中の幸いであったといえる。  
　本共同研究の成果は二〇二二年度中に論文集として刊行することを予定している。

研究課題　観世音寺公験案の集成と研究

研究経費　三七万二〇〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　森哲也(九州大学）

　所内共同研究者　稲田奈津子・遠藤基郎・山口英男

　所外共同研究者　重松敏彦（太宰府市公文書館）・三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

研究の概要

（１）課題の概要

　保安元（一一二〇）年、筑紫観世音寺は東大寺末寺化に伴い、八世紀代以来の伝来文書について公験案を作成して進上した。それらは東大寺図書館を始め、国立公文書館（内閣文庫）等、寺外の各所にも分蔵され、確認できる公験案は二四点を数える（一点は焼失、二点は正文）。本研究では、これら公験案二四点を集成・翻刻して広く学界の共有財産化を図るとともに、地方寺院における文書保管、資財管理の実態解明、寺領経営の再検討等、公験案としての分析を行おうとするものである。今年度（過年度の繰越分）は、これまでの成果を踏まえ、公験案の集成を完成し、伝来過程等に関する整理を行うとともに、公験案に関する基礎的考察、観世音寺の東大寺末寺化の背景等についても分析を加え、報告書を作成して本研究課題の完成を図る。

（２）研究の成果

　今年度は、本研究課題の総括として、これまでの調査･検討の成果を踏まえ報告書を作成した。中でも、現段階で知られている観世音寺公験案を集成し、史料調査の成果、共同研究員による検討、写真帳、影写本等に基づく校訂を施し、刊本、標註、参考文献、伝来過程等に関する情報を盛り込んだ「観世音寺公験案集成稿」（森編）を作成できたことが大きい。これによって、関係情報とともに公験案を一覧することが容易になり、公験案の生成～現在に至るまでを対象として叙述した「観世音寺公験案の基礎的考察」（森）と合わせ、観世音寺、大宰府、東大寺に関する研究の深化に寄与するものと考えられる。「一二世紀前半の東大寺別当と観世音寺・鎮西米－特に寛助に注目して－」（三輪）は、観世音寺の東大寺末寺化に際し、東大寺別当、特に寺外別当の果たした意義を明らかにしたもので、中世寺院へと変貌を遂げる東大寺の歩みを研究する上で重要な成果である。「補説・『観世音寺資財帳』原本ならびに同資財帳複製の調査」（森）では、時間的な制約もあったが、原本の観察によって同資財帳の様態について、これまで指摘されなかった点を確認でき、複製の調査においても、紙面の痕跡から料紙の編成について新たな可能性が指摘されるなど、今後も同資財帳に関する調査・研究を継続する必要性が示された。観世音寺現蔵の中近世文書撮影に際しても、現存未確認のため内容が判明しない公験案に関し、その手がかりとなる記述が見出されるなど、今後の研究進展につながる発見があった。  
さらに東京大学史料編纂所日本古文書ユニオンカタログデータベースの当該文書レコードから、本報告書PDFに飛べるようにすることで、より広い学術利用を可能とした。  
以上、本共同研究では、コロナ禍の中で制約をうけた部分もあったが、古代史と中世史、観世音寺と東大寺という、それぞれの視点による分析が効果を上げ、また、長年にわたる正倉院文書や東大寺文書の調査と出版により蓄積されてきた経験知が発揮されたと言えよう。

研究課題　藤波家旧蔵史料の調査・研究

研究経費　四〇万九七六〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　高橋秀樹（國學院大學）

　所内共同研究者　尾上陽介・遠藤珠紀

　所外共同研究者　田中大喜（国立歴史民俗博物館）・比企貴之（國學院大學）

研究の概要

（１）課題の概要

　神宮祭主であった藤波家の旧蔵史料は、宮内庁書陵部や國學院大學の史料群が知られているが、史料編纂所にも「藤波家蔵書」の蔵書印をもつ近世写本が所蔵されているほか、各地の所蔵機関に旧蔵の文書や書籍が所蔵されている。また、国立歴史民俗博物館の「広橋家旧蔵記録文書典籍類」が明治時代末～大正時代には藤波家に所蔵されていたことも知られており、その時期に複数回作成された蔵書目録が史料編纂所・東洋文庫、國學院大學に現蔵されている。  
昨年度は、各所蔵機関の蔵書目録等から判明する藤波家旧蔵史料をデータ化し、京都学・歴彩館、徳島大学等の現蔵史料を調査した。そこで本年度は、①未調査分の史料調査を行い、データの充実を図る。②昨年度画像データを取得した複数の蔵書目録の分析を行って、目録間の異同と、現存する旧蔵書との関係を明らかにし、複数の所蔵機関にまたがる公家文庫を総合的に研究するための基礎を築く。③奥書等の分析から祭主家がどのように公家日記を集積したのか、またどのような経緯を経て蔵書が散逸していったのかを関係史料から追究する。

（２）研究の成果

　本共同研究の研究成果として刊行した『東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一－八　藤波家旧蔵史料の調査･研究』（研究代表者高橋秀樹、二〇二一年一一月）には、下記の論考および史料翻刻を掲載している。  
高橋秀樹「藤波家旧蔵史料の現状と伝来」は、シンポジウム報告以後に判明したものを含め、三三の所蔵機関・個人に現蔵あるいは旧蔵されている藤波本、市場に出て現蔵者不明の藤波本を取り上げ、いくつかの蔵書目録の内容も踏まえて、藤波家蔵書の形成・散逸の過程をたどった。  
比企貴之「祭主藤波家関係史料の所在とその性格」は、中世～近世の藤波家をとりまく状況を念頭に置きつつ、神宮文庫・神宮徴古館農業館・國學院大學図書館「藤波家文書」・東京大学文学部宗教学研究室「正親町家旧蔵神道関係史料」の内容を考察する。  
尾上陽介「東京大学史料編纂所所蔵『藤波家蔵文書記録目録』に見える『民経記』原本の構成」は、継目の糊が剥がれた状態の時に作成された『藤波家蔵文書記録目録』における『民経記』の記述と国立歴史民俗博物館に所蔵されている現状とを比較し、近代以前の『民経記』原本のあり方や改装過程を復元する。  
田中大喜「「広橋家旧蔵記録文書典籍類」所収文書群の書誌的考察」は、題簽や押紙の記号から、類纂が行われた文書群、並び替えが行われた文書群、原形を留める文書群に分類し、『藤波家蔵文書記録目録』と比較することで、目録の性格を明らかにした。  
遠藤珠紀「広橋家文書の伝来寸描」は、鎌倉～室町期における家記の保管・伝領の様相を示した上で、他家から混入したとみられる國學院大學図書館所蔵『文正元年十二月記』と国立歴史民俗博物館所蔵『文和元年（観応三年）記』の記主を探る。  
藤波家･広橋家蔵書目録翻刻集として、「國學院大學図書館所蔵『藤波･広橋両家ノ古文書調』」（梶田航平）、「国立公文書館所蔵『広橋家記録類目録』」（小堀貴史・百瀬顕永）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家歴代記録目録』（『諸家歴代日記目録』の内）」（百瀬顕永）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家記録目録』（『諸家蔵書目録甲四』の内）」（小堀貴史）、「東京大学史料編纂所所蔵『広橋家所蔵古鈔本記録文書目録』」（日野真木・佐藤瑞樹）を掲載した。  
本報告書には、藤波家・広橋家史料について考えるための基礎となる史料紹介、伴瀬明美「史料編纂所所蔵『古文書目録』（『藤波家蔵文書記録目録』）」を再録している。  
公家日記に関心をもつ研究者、武家文書に関心をもつ研究者、神道・神社史料に関心をもつ研究者が共同研究を行うことで、多様な性格をもつ史料群について多面的・多角的な研究を行うことができた。また、補助員として参加してくれた國學院大學大学院生による史料翻刻を彼らの研究業績として掲載できたことにも意義があった。

研究課題　多可町杉原紙研究所所蔵寿岳文章氏和紙コレクション料紙調査研究

研究経費　四九万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　湯山賢一(多可町杉原紙総合調査委員会）

　所内共同研究者　及川亘・石津裕之・高島晶彦

　所外共同研究者　安平勝利(多可町那珂ふれあい館）・大川昭典(元高知県立紙産業技術センター技術部長)・本多俊彦(金沢学院大学)・富田正弘(富山大学名誉教授)

研究の概要

（１）課題の概要

　本コレクションは、日本前近代における紙の歴史の学術的研究について先駆的業績を残した寿岳文章氏が、その研究のため全国を回って蒐集した和紙原本の集積である。寿岳文章氏が新村出氏とともに、中世に最も使用された杉原紙の原産地として、多可町杉原谷の地を認定したのをきっかけとして、多可町で杉原紙の復興と研究の機運が高まり、杉原紙研究所が設立され、活動を続けてきたが、文章氏の没後、令嬢の章子氏から当該コレクションが杉原紙研究所に寄附され、研究所で整理が行われてきた。ただ、これまでの整理では、産地と紙の種類などの確認がなされているが、紙の厚さ・重さ・密度、原材料や填料、製紙法の解明など物理的技術的解明までは行われていない。  
本調査研究は、これまでの整理をさらに進化させ、上記の調査研究を進めようとするものである。確かに、このコレクションは、戦前に制作されたものではあるが、原材料や技術は前近代に近いものがあり、何よりも全国にわたって網羅的に蒐集されているところに意義がある。したがって、近世の製紙の地域的特質を考える上でも、重要な材料となることは間違いない。そして、これらの調査研究の結果を、数量的に、かつ顕微鏡写真などによって視覚的に、学界の共通素材として提供せんとするものである。

（２）研究の成果

　二〇一九年度の共同研究で得たデータを含め、東北・北陸・関東甲信越・関西・中国・四国・九州一六〇の和紙の原材料、塡料の種類と分量、繊維切断の有無、非繊維物質の残存度、縦横寸法、厚さ、重さ、密度、簀目の太さ、糸目幅、繊維束の状況、板目・刷毛目・紗目などの料紙データおよび繊維の顕微鏡画像データを得た。  
また本コレクションから近世和紙生産の地域分布の状況の考察した結果、近世の抄紙技術を継承し、その姿を伝えているものと洋紙に対抗する白さを意図的に用いられた木材パルプや稲藁、マニラ麻、エスパルト等を原料に加えた近代の技術変革と製品の均一化が見受けられること、原料確保の容易さから役所文書反故を原料とする漉き返し(再生紙)も多いこと、昭和時代前半の和紙は圧倒的に後者の方が多く、近代和紙の時代であることを証明した。  
なお、調査結果については、東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二一－一二「多可町立和紙博物館壽岳文庫所蔵寿岳文章和紙コレクション料紙調査研究　東京大学史料編纂所一般共同研究報告書(二〇一九年度～二〇二一年度)として刊行した。

研究課題　『江雲随筆』の研究資源化――近世初期日朝「境界」文書群――

研究経費　五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　米谷均（早稲田大学）

　所内共同研究者　鶴田啓・須田牧子・岡本真

　所外共同研究者　村井章介（東京大学名誉教授）・佐伯弘次（九州大学名誉教授）・臼井和樹（宮内庁書陵部）

研究の概要

（１）課題の概要

　東京大学史料編纂所所蔵謄写本『江雲随筆』は、近世初期の日朝関係史に関わる文書を多数収める文集で、田中健夫編『善隣国宝記　新訂続善隣国宝記』（集英社、一九九五年）で『続善隣国宝記』の校合に用いられただけでなく、申請者・共同研究者も論文でしばしば利用してきた。しかし未だ全文翻刻はなされておらず、史料的性格・成立・諸本系統といった基礎的事項も本格的に検討されてこなかった。本共同研究では、①諸本および関連諸史料の調査、②調査結果をふまえた本文校訂・所収文書の年代推定・人名比定などを行い、③『江雲随筆』の全文翻刻を行うものである。

（２）研究の成果

　二〇一九年度の活動で、史料編纂所謄写本の全文翻刻、および東京・京都での諸本の調査・撮影を行った結果、諸本間で異同が多く確認され、史料編纂所謄写本を底本とする場合でも校訂作業が必要であることが分かった。調査結果をふまえた本文校訂・所収文書の年代推定・人名比定などを進め、『江雲随筆』の翻刻全文を公開することで、今後の対外関係史研究、とりわけ近世日朝関係史の実態解明に資する史料を提供することができると考える。

研究課題　史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費　五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　渡辺美季（東京大学）

　所内共同研究者　須田牧子・黒嶋敏・岡本真

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・辻大和（横浜国立大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集成が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における形式・作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された類似文書との比較検討が不可欠である。  
そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九年度一般共同研究に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③韓国の国立中央図書館・韓国学中央研究院において明清中国から朝鮮に発給された類似文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的位置づけを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（２）研究の成果

　韓国調査が出来なかったのは残念だが、コロナ禍を逆手にとって研究計画を大きく見直し、成果報告書の作成・刊行に注力した。報告書掲載の諸史料については、当初予定していたよりも広い視点から多くの論点を掘り下げることができ、編纂所所蔵の明清公文書の史料学的位置づけを、いっそう明らかにすることができた。これには日本・琉球・朝鮮史を専門とするメンバーに加え、海外研究協力者である林慶俊氏（韓国・東北大学）・劉序楓氏（台湾・中央研究院）の多大な協力を得たことで、同時代東アジア諸国の発給文書をより複眼的な視野で見通すことが出来たことが大きい。また刊行にあたって、東京大学史料編纂所研究成果報告書として支援を得たことにも謝意を表する。  
カラー版の鮮明な図版を伴う成果報告書は、明清公文書の専論として類例が乏しかったこともあり、幸いにも好評を博した。また、国際的な成果発信の一助とするべく英語・中国語・韓国語の要旨を付しており、オンラインで公開したことにより、世界中どこからもアクセスできるようにした。これにより本研究成果の国際的な活用が期待される。

研究課題　一八世紀オランダ東インド会社の遣清使節日記の翻訳と研究

研究経費　四五万二四二二円（前年度よりの繰越）

研究組織

　研究代表者　　　大野晃嗣（東北大学）

　所内共同研究者　松方冬子・大東敬典

　所外共同研究者　森田由紀・Leonard Blussé（ライデン大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　オランダ東インド会社は、清朝との貿易を実現・改善するため、何回か使節団を派遣しているが、そのうち、一七九四～一七九五年の乾隆帝の在位六〇年を祝う使節団は、有名なイギリスのマカートニー使節団との対比上も有名である。正使は、日本商館長を務めたティチングであった。しかし、ティチング使節団の残した記録は、ティチング自身によるオランダ語の日記のほか、副使ファン・ブラーム・フックへ―ストによるフランス語の日記、さらに通訳として同行した学者ド・ギーニュによるフランス語の日記があり、最低限でもオランダ語とフランス語の読解力が必須である。さらには地名・人名・官名を含む当時の中国についての広範な知識をも必要とするため、今まで日本語に訳されたことはなかった。今回、中国史研究者（大野、Blussé）、オランダ語史料の翻訳実績を持つ史料編纂所海外2室の教員が、在野の翻訳者に協力する形で、この課題に挑む。

（２）研究の成果

　本研究は、多様なバックグラウンドをもつ研究者、ノン・アカデミックの翻訳者が一堂に会することによって新しい知見を得ることを目的とし、その目的は着実に達成されつつある。  
細かいところでは、ティチングの日記によるSjapという言葉の訳出である。Sjapはマレー語で「印（いん、しるし）」のような意味であり、一般にアジアで活動するオランダ語史料のなかで多用される。ティチングによる日記においても、「印のある書翰」「印のある証書」の意味で使われているだけでなく、「龍牌」（皇帝の名前を記した位牌状の板）の意味でも使われている。清朝の総督・巡撫が任地にあって、いわば「皇帝の代わり」として儀礼に「龍牌」を使用することは、大清會典に見えるが、その具体的な使われ方は漢文史料ではなかなかわからないため、本日記の記述は貴重である。ティチングと皇帝の謁見の場も、けっして儀式的な雰囲気ではなく、屋外のカジュアルな場面であり、参加した明清史研究者（大野）から意外だとの感想が聞かれた。清朝史研究にオランダ語史料を用いることのメリットが明らかになった。  
大きなところでは、既存の異文化論の枠組みをあらためて検証する必要性が指摘された。ティチングの日記は最近Tonio AndradeがThe Last Embassyという書物で取り上げ、（ティチングの遣使は具体的な成果もなく失敗だったという従来の評価に対し）交流自体を目的とする「社交外交」なので成功だったと論じている。本研究では果たして「成功」「失敗」という評価のあり方が妥当なのかが、議論になった。参加した西南アジア史研究者（大東）が、インド史研究者Sanjay Subrahmanyamの学説を援用し、（従来の「分かり合えないincommensurability」という暗黙の前提に対する）「大体分かり合えるcommensurability」概念が有効なのではないかと提案した。  
オランダ東インド会社の遣清使節日記の「翻訳」が単なる翻訳ではなく、学際的な議論の場となり、細かな事実関係から世界史の描き方に至る多様な論点を浮かび上がらせる場となっている。

研究課題　長崎市中「本石灰町乙名本山家文書」の研究資源化に向けた調査研究

研究経費　五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　藤本健太郎（長崎外国語大学）

　所内共同研究者　松井洋子・荒木裕行

　所外共同研究者　木村直樹（長崎大学）・吉岡誠也（東京大学地震火山史料連携研究機構）・赤瀬浩（長崎市長崎学研究所）・德永宏（長崎市長崎学研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

　本石灰町（もとしっくいまち）は長崎市中八〇か町のうち、丸山遊廓を構成した丸山町と隣接する町である。本石灰町の乙名職は一八世紀後期以降、本山家が六代にわたり襲職し明治に至った。本山家で保管していた古文書史料のうち、約一一五〇点が「本石灰町乙名本山家文書」として現存している。「本石灰町乙名本山家文書」は、近世長崎の町乙名を中心とした都市運営の実態を知る上で貴重な記述が多数確認されており、近世都市史研究にも研究成果を還元できる重要な史料群である。  
　しかし、当該史料群の収蔵機関は、現在東京大学史料編纂所（所蔵分と寄託分）と長崎歴史文化博物館（長崎県立長崎図書館寄贈分、長崎市長崎学研究所購入分を収蔵）の二か所に分散しており、両機関に収蔵されている史料を本山家に由来する史料群として、包括的に整理・把握できていない状況にある。  
　本研究では、両機関に収蔵されている史料群の概要把握を進めるとともに、史料1点ごとの概要掲載を含む、詳細な総合目録を作成することで「本石灰町乙名本山家文書」の研究資源としての活用に努めたい。また、その史料群の特性を踏まえた共同研究も実施する。

（２）研究の成果

　二〇二〇～二〇二一年度の目録記述作業と史料調査によって、三カ所に分散した本山家の文書、総点数一四六〇点余の全体像を把握し、目録情報を総合することができ、来年度には目録を刊行する見通しがたてられた。（全体の構成については二〇二〇年度実績報告書参照。）  
　両所蔵機関の研究者の共同研究という形をとったことで、所蔵機関の壁を超えた調査をスムーズに行うことができ、また、惣町絵図の中での本石灰町の状況や本山家の親戚や養子などを介したネットワークなど、長崎在住の研究者との知識の共有は、個別の文書の内容理解に資するところが大きかった。  
　一紙ものが多い史料編纂所購入分史料についても、今後の研究利用の幅が広がることが期待できる。

研究課題　一四～一七世紀における奄美・琉球関係史料の学際的研究

研究経費　二六万四二三〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　村木二郎（国立歴史民俗博物館）

　所内共同研究者　黒嶋敏

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・田中大喜（国立歴史民俗博物館）・池田榮史（琉球大学）・鈴木康之（県立広島大学）・池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）

研究の概要

（１）課題の概要

　琉球は明の冊封を受けた一四世紀以降、周辺諸島を軍事的に侵攻していくが、そのうち奄美諸島への侵攻過程については史料的な制約が大きく未解明な点も多い。しかし近年、奄美諸島のうち琉球の侵攻対象となった喜界島では重要な中世遺跡の発掘成果が相次いで報告されており、考古学の見地から琉球側の勢力伸長の過程を跡付けつつある。一方で、当該地域に関する同時代の文献史料は乏しいが、のちの時代に作成された地誌類や絵図といった近世・近代史料のなかに援用しうる歴史情報を持つものが少なくない。  
　そこで本研究では、一四～一七世紀における琉球の侵攻・支配について、喜界島に焦点を定め、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を進めていく。考古学の研究者による、現地調査を主とした当該期の集落の検証と、文献史学の研究者による、史料編纂所が所蔵する関連史料の原本調査と高精細デジタル撮影を主とした比較・解析を行い、双方の研究成果を突き合わせ、成果を公開して「史料の研究資源化」を行うものである。

（２）研究の成果

　二〇二一年度については研究費を執行できず、研究活動を実施できなかったため、とくになし。

研究課題　中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係―石見国妙義寺を中心に―

研究経費　三五万七四二〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　中司健一（益田市歴史文化研究センター）

　所内共同研究者　西田友広

　所外共同研究者　目次謙一（島根県古代文化センター）・福田善子（山口県立美術館）・濱田恒志（島根県立古代出雲歴史博物館）・角野広海（島根県立石見美術館）

研究の概要

（１）課題の概要

　島根県益田市の曹洞宗妙義寺は、中世以来の歴史を誇り、中世のものも含め豊富な古文書を伝える。それらは一部が『曹洞宗古文書』や『中世益田・益田氏関係史料集』に収録されているが、まだその全体像は示されていない。  
　妙義寺は、中世に益田氏の菩提寺であったこと、中国地方の曹洞宗の中核的な寺院である大寧寺との緊密な関係、末寺である益田市域の多くの曹洞宗寺院との関係、江戸時代における三隅の龍雲寺や津和野藩との末寺の帰属をめぐる問題、一方で広域的な文化交流の様相など、中世・近世における曹洞宗寺院の支配者や他寺院との関係について非常に興味深い事例を多く見いだすことができる。  
　そこで、本共同研究では、妙義寺文書や所蔵する文化財について学際的に調査し、目録化・活字化を進めるとともに、関連する寺院等の文書や文化財もあわせて調査することで、研究資源化と中近世山陰西部における曹洞宗寺院の諸関係について考察することとしたい。

（２）研究の成果

　（１）妙義寺釈迦十六羅漢図について  
①美術史的価値：作者は雪舟流の人物と思われ、高麗仏画や、雪舟を介して受け継がれていた禅月様十六羅漢図や蔡山筆羅漢図の図像・描法を参照しつつ、描いたと思われる。  
②歴史的背景：安土桃山時代に妙義寺が中興された際に、中興開山として招かれた大寧寺の関翁珠門が寄進した可能性が高い。江戸時代に津和野藩や龍雲寺との関係の中で、本末関係が動揺した際に、結束を再度強めるために修復が行われる。  
（２）大寧寺とその文化財  
美術品は貴重な作品が多く見られたが、益田家お抱え絵師永冨家の作品が多くあることが注目される。中世末期に益田氏が寄進したという仏像三体は、画像による所見であるが、一七世紀後半を遡ることはない、という評価を得た。墓地には、益田元祥以降の歴代益田氏当主の墓が所在する。総じて、益田家と非常に関わりが非常に深いことが改めて確認された。  
（３）益田兼房氏所蔵文化財  
①衣冠姿の益田元祥像：さらなる調査が必要であるが、一七世紀代のものである可能性が高く、作者等がわかれば益田家の文化性がさらに明らかになる可能性がある。  
②伝益田元祥所用の帷子：一七世紀初頭を下らないものであり、服飾史上も注目される。  
（４）総論  
　中世から近世の益田氏・益田家の、同規模の領主と比較してもかなり高水準の文化性、特に雪舟と深く関わり、その技法の継承や名声の確立に少なからず貢献したことがうかがわれた。  
　益田氏・益田家は戦国時代から曹洞宗、特に大寧寺に深く帰依し、大寧寺から中興開山を招いて妙義寺が中興された。江戸時代になると、妙義寺は益田氏という庇護者を失い、龍雲寺との関係の中で本末関係が動揺する。益田氏・益田家は旧領である益田の寺院への経済的・文化的支援を行っていた様子もうかがわれた。

研究課題　和歌山平野を中心とした地域所在中世史料の調査・研究

研究経費　三四万六〇八一円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　坂本亮太（和歌山県立博物館）

　所内共同研究者　村井祐樹・高橋敏子

　所外共同研究者　小橋勇介（和歌山市立博物館）・砂川佳子（和歌山県立文書館）

研究の概要

（１）課題の概要

　和歌山県における中世史料は、『和歌山県史』の刊行により、その全貌がほぼ明らかになっている。また、本研究で対象とする和歌山平野域（主に和歌山市）については、『県史』刊行後、『和歌山市史』が刊行され、『県史』未収録の史料群も『市史』により把握されている。ただし、当時においても種々の事情により十全な調査・発掘が行われたものではなく、存在は把握していながらも点数が少ないという理由で採録しなかったものや、原本調査に至らず、史料編纂所架蔵影写本に拠らざるを得なかったものも多数あった。さらに、刊行から既に四〇年以上が経過し、その間に新たに発見された史料も少なくない。  
以上の様な状況の中で、本課題で対象とする和歌山平野（主に和歌山市）域では、林家文書（和歌山市立博物館所蔵文書と林峯之進家文書）・玉置作太夫家旧蔵文書など、『県史』『市史』からも漏れた少なからぬ新出文書が確認されており、さらには市立博物館の精力的な研究・展示活動により、和歌山市域外の関係文書も多数発掘されている。そこで、明治・大正期に作成された影写本や、昭和以降に撮影された写真帳等、豊富な複本類を持つ史料編纂所と共同することで、当該地域所在史料の調査・研究を行いたい。

（２）研究の成果

　以下、調査・撮影を行った史料を挙げる。  
　玉井文書（市博所蔵）／淡嶋神社文書（市博借用中）／善勝寺文書（市博寄託）／総持寺文書（同上）／西正寺所蔵文書（和歌山市）／念誓寺文書（同上）／室谷文書（同上）／且来八幡神社（海南市）／専徳寺所蔵文書（泉南市）／十津川村宝蔵文書（十津川村）／風屋文書（十津川村教育委員会寄託）／下葛川文書（同上）  
  
　以上の内、玉井文書は新出、他は『和歌山県史』『和歌山市史』に収められているものの、所在が確認できてなかったものもあり、今回その確認ができた。また十津川村所在文書は紀伊守護畠山氏関係の文書を多く含む。いずれも今後の和歌山中世史研究における活用が望まれる。

研究課題　高野山伝来聖教奥書集成にむけての調査・研究―平安・鎌倉時代を中心として―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　藤本孝一（龍谷大学）

　所内共同研究者　渡邉正男・高橋慎一朗

　所外共同研究者　坂口太郎（高野山大学）・土居夏樹（高野山大学）・野田悟（高野山大学）・木下浩良（高野山大学）・大河内智之（和歌山県立博物館）・小林雄一（漢字文化研究所）

研究の概要

（１）課題の概要

　近年、日本中世史の分野では、寺院史料の重要性が強く認識されつつある。とくに、南都仏教や真言・天台宗の寺院に伝来した聖教には、仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会史・文化史に関わる内容を持つものが多く、豊かな可能性を持つ史料群と言える。 本研究は、高野山の主要な子院に伝来した平安・鎌倉時代の聖教を研究対象とし、調査・検討を進めるものである。高野山の聖教は、明治以来、多くの調査がなされてきた。しかし、子院伝来の聖教は、古文書に比してさほど情報公開が進んでおらず、研究の促進に繋がっていない。とりわけ、聖教の研究を進める上では、奥書情報の把握が不可欠であるが、既往の調査成果がほとんど学界で共有されていない上、調査未着手の聖教も数多く残っている。 そこで、本研究では、金剛三昧院・西南院・三宝院・持明院・真別処などの子院に伝来した聖教（西南院以外の聖教は、高野山大学図書館に寄託中）の調査に取り組む。とくに、奥書類の翻刻・集成を通して、今後の研究者による聖教調査・研究の基盤を整える。さらに、平安・鎌倉時代の密教史に関わる重要な聖教にも、できるかぎり個別的な検討を加える。

（２）研究の成果

　新型コロナウィルス感染症の拡大が止まないため、当初の研究計画を縮小せざるをえなかったが、研究代表者の藤本と共同研究員の坂口が協力しながら、調査・研究を進めた。とくに、西南院聖教や金剛三昧院聖教（高野山大学図書館寄託）を調査して、平安・鎌倉時代の識語・奥書類を抽出した。その過程で、鎌倉後期の証道房実融（金剛三昧院長老、意教流証道方の祖）が写した『祈雨』や、小島流聖教の『聖天』などに、多くの紙背文書が含まれていることが判明した。とりわけ、後者には永仁三年（一二九五）の「西園寺実兼御教書」などの讃岐国関係文書があり、史料的価値は非常に高いと考えられる。  
また、従来から取り組んでいた重要文化財『西南院文書』の翻刻を続行し、第四巻の翻刻を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三二号に発表した。さらに、二〇二一年一月に金剛三昧院経蔵で見つかった棟札四枚を調査し、①正応四年（一二九一）六月一日、②明応五年（一四九六）五月一六日、③永正一七年（一五二〇）七月七日、④寛永元年（一六二四）四月五日の年紀を持つ銘文を確認した。①②③は経蔵（国指定重要文化財）、④は客殿（同上）の棟札であり、とくに①は高野山最古の棟札の可能性が高く、きわめて貴重である。これらの棟札によって、貴重な聖教を伝えてきた金剛三昧院経蔵の沿革（修復や移転）が明らかとなった。  
なお、上記の棟札については、『毎日新聞』和歌山版で取り上げられた（二〇二二年三月一三日）。金剛三昧院の経蔵やその伝来史料の価値に対する社会的認知度を高める上で、有意義な記事であった。関係各位に深く感謝したい。

研究課題　聖衆来迎寺史料の調査・研究

研究経費　三〇万九四五四円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　高橋大樹（大津市歴史博物館）

　所内共同研究者　林晃弘・末柄豊・村井祐樹

　所外共同研究者　和田光生（大津市教育委員会）・井上優（滋賀県教育委員会・琵琶湖文化館）

研究の概要

（１）課題の概要

　滋賀県大津市比叡辻に所在する聖衆来迎寺は、最澄の建てた地蔵教院を起源とし、源信が念仏道場として再興したという所伝を有する天台宗の古刹である。もとは比叡山横川に伝来した国宝『六道絵』一五幅を所蔵するほか、天正年間に京都に所在した元応寺を併合したこともあずかり、多数の文化財を伝えている。  
東京大学史料編纂所は、早くに明治二一・大正一二・昭和二年の三度にわたる史料採訪を行い、文書・聖教取り混ぜて少なからぬ影写本・謄写本を作成している。その後、『六道絵』については、近年本格的な調査研究がなされたのに対し、文献史料については、一九八四年に琵琶湖文化館が「特別展 聖衆来迎寺」を開催したのを契機に、江戸時代成立の寺史『来迎寺要書』を紹介した程度で、本格的な調査研究はなされていない。『新修大津市史』編纂のための調査でも、対象史料は一部に限られ、写真撮影もほとんどなされなかった。  
今般申請者の勤務先である大津市歴史博物館では、仏像・絵画・古文書を中心に同寺の寺宝展を開催することとなり、付随して所蔵史料についても悉皆調査の御許可を得た。この機会を生かし、文書・聖教の総合調査を行いたい。予備的な調査によって影写・謄写の対象になった中世史料の一部の存在を確認したほか、未調査の近世史料が多数存在していることが判明しており、近世史料も視野に収めた調査研究をすすめたい。

（２）研究の成果

　二〇二一年度は、前年度に十分に実施できなかった聖衆来迎寺所蔵の近世・近代文書の整理を行った（大津市歴史博物館寄託分）。近世文書は、(１)聖衆来迎寺の経営等に関するもの、(２)高島郡阿弥陀寺（真言律宗・西大寺末、聖衆来迎寺が兼帯）に関するものに分けられる。それぞれについて調査により得られた主な知見は以下のとおりである。  
(1)　聖衆来迎寺近世文書。開帳関係の史料が比較的多く残されている。なかでも宝暦九年（一七五九）からの江戸湯島天神における開帳については日記がある（一－〇六四）。これらと関連する寺外の史料により、開帳に関する手続きや霊宝の構成、人びとの信仰のありようなどが具体的に明らかになる。  
　また寛文三年（一六六三）・四年に聖衆来迎寺の僧（林昌坊ヵ）が京都・大坂等に出向いた際の記録があり、概して簡略な記述ではあるが、訪問先の様子や、人的な交流を知ることができる（三－〇七〇）。注目される記述としては、美作国津山藩の森長継の家臣と知人になり、織田信長家臣で下坂本にて討死した同家の祖森可成についての情報を伝え、求めに応じて書付を渡したことを記す。これは『来迎寺要書』の記事とも関連するものである。  
(2)　高島郡阿弥陀寺関係文書。特に分量が多いのが同寺の朱印改の関連史料であり、宝暦一〇年（一七六〇）・天明七年（一七八七）・天保一〇年（一八四〇）・嘉永七年（一八五四）の一件記録が残されている。宗派をまたいだ兼帯寺院の僧による特異な事例であり、寺領の所在する堀川村の相給領主蜂屋氏との関係においても例外的な面がある。近世の本末関係のあり方や朱印地寺院の領主的な性格を考える上で注目される。また、「阿弥陀寺年中行事什物幷鑑院江引渡し定式」（三－四四－一六）は、阿弥陀寺と周辺村落の関わりがわかる好史料である。

研究課題　高野山西南院文書の調査・研究―高野山伝来史料の研究資源化にむけて―

研究経費　一万八〇四〇円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　坂口太郎（高野山大学）

　所内共同研究者　渡邉正男

　所外共同研究者　藤本孝一（龍谷大学）・土居夏樹（高野山大学）・野田悟（高野山大学）・木下浩良（高野山大学）・辻浩和（川村学園女子大学）・澤田裕子（京都光華女子大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究は、高野山西南院に伝来した古文書・聖教・石造物について、調査・研究を行なうものである。西南院は高野山の子院の中でも、屈指の文化財を伝えることで知られる。その中核となるのは、重要文化財『西南院文書』全一一巻（高野山霊宝館寄託）であるが、それ以外にも貴重な古文書・聖教が数多く保管されている（「西南院現蔵史料」）。  
　本共同研究では、二〇一八～一九年度に、重要文化財『西南院文書』の原本調査・撮影を行ない、同文書の翻刻や「西南院現蔵史料」の調査にも着手した。引き続き、重要文化財『西南院文書』の翻刻を継続するとともに、「西南院現蔵史料」についても、より正確な全体像を把握すべく、調査・撮影を進める。さらに、高野山最古の紀年銘を持つ鎌倉時代の五輪塔など、西南院境内にある石造物の調査を行ない、文献史料と併せて検討することで、中世高野山をめぐる信仰について検討を進めていく。

（２）研究の成果

　新型コロナウィルス感染症の拡大が止まないため、当初の研究計画を縮小せざるを得なかったが、研究代表者の坂口と共同研究員の藤本が協力しながら、調査・研究を進め、従来から取り組んでいた重要文化財『西南院文書』の翻刻を続行し、第四巻の翻刻を『東京大学史料編纂所研究紀要』第三二号に発表した。同史料は、一九六九年に西南院で火事が発生した際に、大きな焼損を蒙った文書を含んでおり、翻刻にあたっては、損傷以前に撮影された史料編纂所架蔵のマイクロフィルムから、大きな便益を受けた。